

王朝女流歌人の「月」

—後拾遺集を中心に—

実川 恵子

月に彩られていく時空を描写した作品が、王朝の文学にはたびたび表われる。

『枕草子』二七七段（角川文庫本）「成信中将は、入道兵部卿の御子にて」段などに頻出する月光の場面は、その輝きの中に懐旧の情を封じ込め、更に心象的な意味合いを含ませてゆく。また、『源氏物語』は物語の展開や登場人物の心のありようと密接な関係を持ちながら、主人公たちの苦悩を救済するという方向へ導く働きをも荷っている。そして、よく引き合いに出される『更級日記』上洛の旅の記に描かれた「まつさとのわたりの月影あはれに見し」乳母との別離、姉の遺児に洩りくる「いとゆゆしくおぼゆる」月影は、孝標女の苛酷な運命そのものを表わしてもいる。

これらの作品を迎える時、月影によって描き出された心の様相は和歌世界ではどのようにとらえられているのか。それを平安和歌史の一つの屈折点とされる『後拾遺集』の月歌に探ってみることにしたい。

後拾遺集を境に「月」歌はしだいに増加していく傾向にある。試みに『八代集総索引』（新古典文学大系）の「月」項目に掲げられた歌数は、

古今20、後撰30、拾遺34、後拾76、金葉51と急増する。この他、「月かげ」10、「月のかげ」5、「月のひかり」5、「月の輪」2例などの歌語を含め、「月」歌への関心の高まりを示している。

特に『後拾遺集』に急増する月歌は、秋上、下、雑一卷に配列される。このうち雑一卷の「雑月」歌には女流歌人詠が目立っている。この点に注目して、月歌がどのような視点でとらえられ表現されるのか。考察してみたい。

『後拾遺集』に入る前に、先行の勅撰集の月歌について少し触れておきたい。

『古今和歌集』に詠われた月は、四季歌では「白雲に羽うちかはし飛ぶ雁のかずさへ見ゆる秋の夜の月」（秋上・11 読人しらす）や

「佐保山のははその紅葉散りぬべきみ夜さへ見よと照らす月影」（秋下・381 読人しらず）などのように、月光の明るさに焦点があてられている歌が多い。また、雑歌では、『大和物語』にも載る「わが心慰めかねつ更級や姨捨山に照る月を見て」（雑上・878 読人しらず）、「かつ見れどうとくもあるかな月影のいたらぬ里もあらじと思へば」（雑上・880 紀貫之）がある。この両歌は、秋の月歌の趣とは大きく異なり、比喩的で述懐的な世界を詠っている。

続く『後撰和歌集』では、秋中歌「いつとても月見ぬ秋はなきものを分きて今宵のめづらしきかな」（325・藤原雅正）と「秋風にいとどふけゆく月影をたちなかくしそ天の川霧」（秋中・336 藤原清正）は、共に中秋の名月のすばらしさを詠うが、いずれも月の美しい輝きを詠う。雑一に収められた月歌は、詳細な詞書を持つ「照る月を枉木の綱に縊り掛けて飽かず別る人をつながん」（1082・河原左大臣）という奇抜な発想による行平朝臣との贈答歌で一つの座興的なおもしろさをねらった歌等が置かれる。

次の『拾遺集』では、始めて「冬の月」が三首（204・205）詠まれている。惠慶法師の「あまの原空さへさえや渡るらん水と見ゆる冬の夜の月」（204）は、冷気の中に冴え渡る冬の月を水に見立てている。月は秋の景物として詠出した伝統を破り、新しい月の美を見出し出している。また、雑上の巻頭に十一首の月歌を置いたのも『後拾遺集』に受け継がれる。この月歌は述懐的な歌から始まり、月を待つ心、月夜に立ち寄らずに通り返していった人への恨みの歌、屏風歌、題詠歌と続き、あはれの歌を主流にしている。

三代集の月歌は、各集ごとの編纂意図に即した内容の歌を集し、素材としての月のとらえ方が異なっている。これらの伝統が『後拾

遺集』にどのように反映されていくのだろうか。

まず、『後拾遺集』四季歌の月歌をとり掲げてみることにしたい。巻五「秋下」（390）、齋院中務の次のような歌がある。

選子内親王いつきと聞えけるとき、九月のとをかあまりにあか月ちかうなるまで人々ながむるに、きしかたゆくすゑもかかる夜はあらじなどいひてよみ待りける

月はよしはげしき風の音さへぞ身にしむばかり秋はかなしき宵の月と激しく吹き荒れる風の音が作者の悲愁を誘い、さらにそれが心に深くしみ入るのである。四句「みにしむ」は古来の用法から逸脱した後拾遺集独自の「色」とは無関係に使われた用法として注目される。

また、詞書から作者が大齋院選子内親王に出仕した折の詠歌であり、「九月のとをかあまり」の月とあるので、おそらく月見の風習とされた十三夜をいうのであろう。

詳細な詞書や、感覚的で月の美しい夜の情趣と作者の心に深く身にしみる風の音という取り合わせによる詠法は漸新さを感じさせる。続く巻六「冬」（391）には大式三位の次の歌を載せる。

冬夜月をよめる

山の端はなのみなりけり見る人の心にぞいる冬の夜の月
詞書から題詠歌のように思われるが、『大式三位集』では、「御堂の月見に人々まかりたりけるに」とあり、詠歌事情は不明だが、おそらく、その折の題詠歌であつたらうか。

この「冬の夜の月」を詠じた歌は珍しく、『拾遺集』巻四「冬」に、「月を見てよめる」と詞書された惠慶法師の、

あまの原そらさへさえや渡るらん水と見ゆる冬の夜の月

がある。冬の夜の冴々とした月を氷に見立てたこの歌の他には、『拾遺集』、雑秋に載る清原元輔の、

いざかくてをり明かしてむ冬の月春の花にもおとらざりけり
があり、他にあまり例を見ない。

大式三位のこの歌は、冬の月の美しさを直接詠んでいるのではなく、皓皓と輝きを放つ冬の夜の月の光が見る人の心の中に入りこみ、いつまでも消えない感興を呼びおこしている。

月に縁どられた一つの風景が、作者の心象と共鳴して『後拾遺集』独特な表現世界を創り上げている。

また、作者の母紫式部も『源氏物語』「朝顔」巻に、「人の心を移すめる花紅葉の盛よりも、冬の夜の澄める月に雪の光りあひたる空こそ、あやしう、色なきものの身にしみて」と冬の月の美を描き出している。

続く月歌は、「羈旅」巻所収の七首（505、522、527）である。少輔の熊野参詣途上の詠歌（505）、

山の端にさはるかそこそおもひしか峯にてもなほ月ぞまたるる
月の出を待つ歌は、古来から多いが、山の端に遮ぎられながら月の出を待つ慣習の身の上を、峰に登っても感じるという己れの心を思い知るといふ体験の上に成り立つ歌である。

続く「羈旅」月歌は、中納言資綱と絵式部の贈答歌（525、524）、
播磨の明石といふ所に塩湯あみにまかりて、月のあかかりける夜、中宮の台盤所にてまつり待ける

おぼつかかな都の空やいかならん今夜あかしの月を見るにも

返し

ながむらんあかしの浦のけしきにて都の月はそらにしらなん

資綱が明るい明石の浦の月を眺め、中宮賢子を気づかした歌に対して、絵式部は中宮に代って詠出したのであろう。資綱の「都の空やいかならん」に対して、「都の月は空にしらなん」と答えた絵式部の歌才が認められる歌であらう。

「月」が単なる美的対象だけの歌材として終わることはない。その月の光に触発されて、人の心の営みの中に揺れるさまざまな想いを写し出していく。王朝女流歌人たちが受け止めざるを得なかった現実の中で、この月影の光と闇の中に身を置いた彼女たちの限りない想像力が次次に目覚めていったものと思われる。

『後拾遺集』の「雑一」巻は、六十首の雑歌を収める。巻頭から三十九首の月歌群が配列されるが、このうち十四首、三十五パーセントを女流歌人詠が占めている。この点は先行勅撰集には見られない特色として掲げられる。

急増した月歌の中にあって、女流歌人詠はどんな意味を荷ってゆくのか。

この「雑一」巻頭歌は、『後拾遺集』雑部の主張を含んだ善滋為政朝臣の題しらず歌（832）、

年ふればあれのみまさる宿のうちに心ながくもすめる月かな
荒れ果てた宿にさし入る澄んだ月の光が、作者の心をとらえ、月がわびしさや哀しさをいやすのである。荒れた宿を照らす澄んだ月が、一層哀感を起こさせるという伝統的な景物に焦点をあてた詠風ではない。そこに描き出されているのは、作者の心象の風景である。

このような傾向の歌を巻頭に据えた撰者の意図が汲みとれる。
この雑月歌群の中盤に位置する次のような贈答歌がある。

鞍馬よりいでて侍りける人の、月のいとをかしければ、
鞍馬の山もかくこそなどおもひいでけるをききて

齋院中務

住みなるる都の月のさやけきになかくらまの山はこひしき

返し

齋院中將

もろともに山の端いでし月なれば都ながらもわすれやはする

この贈答の作者は姉妹で、齋院中務贈答詞書の「鞍馬よりいでて侍りける人」と、次歌との関係が明らかでない。歌の内容から、この姉妹は鞍馬に住んでいたことがあり、里下かりしていた中務と齋院の姉中將との贈答歌、あるいは、鞍馬出身の女房のことを話題にした二人の贈答とも読める。

いづれにしても、この両歌は、都に住みながらもかつて賞翫した鞍馬の美しい月の風景を回顧している。二人の心に浮かぶのは、共に見た過ぎ去った時空の月の輝きであったろうか。

また、次のような贈答歌もある。

来むといひつつ来ざりける人のもとに、月のあかりけ

ればつかはしける

小弁

なほざりのそらだのめせでははれにも待つにかならずいづる月か

な

返し

小式部

たのめずは侍たでぬる夜ぞかさねましたれゆゑか見るありあけの

月

小弁と小式部とは同じ後朱雀天皇皇女祐子内親王家子房であり、このような贈答ができるような気のおけない間柄であったようだ。

小弁歌だけを読むと恋歌とも受けとれるが、次歌から約束を果たさなかつた小式部への軽妙な戒め、さらに小式部の開き直りの応酬の歌となっている。

月を題材にして、恋歌に似せた作風とユーモラスな詠いぶりは「雑一」巻にふさわしい内容の歌といえよう。

雑月歌終盤には、女流歌人の三首の詠歌が続いている。「後拾遺集」に一首のみを集める中原長国妻の次のような歌(889)がある。

月を見てよみ侍ける

もろともにおなじうきよにすむ月のうらやましくも西へゆくかな
月は、自分と共に浮世に住み、その叶えがたい極楽往生を果たすことへの羨望が詠まれる。結句「西へ行くかな」に西方浄土を連想する詠風は珍しく、当歌がその先駆となっているようだ。

これ以後、浄土信仰の高まりと共に、「金葉和歌集」や「千載和歌集」等に次々と詠われるようになる。

雑月の最終部に置かれたのは、大納言道綱母の次の二首(889・870)で、共に「蜻蛉日記」にも載る歌である。

入道雲政物がたりなどして、寝待ちの月のいづる程に、

とまりぬべきことなどいひたらばとまらん、といひ侍り

ければよみ侍りける

いかがせん山の端にだにとどまらで心のそらにいづる月をば

月のおぼろなりける夜、入道撰政まうできてものがたり

し侍りけるに、頼もしげなき事などいひ侍りければよめる

くもり夜の月と我身のゆくすゑとおぼつかなきはいづれまさり

このいずれの歌の詞書や歌に、「寝待ちの月」、「心のそらに出づる月」、「月のおぼろなりける夜」、「くもり夜の月」とある。

『蜻蛉日記』に従えば、御歌は天徳元年秋条に見え、「例のつれなう夜ふけて、寝待の月の、山の端出づるほどに、出でむとする気色あり。さらでもありぬべき夜かなと思ふ気色や見えけむ、『とまりぬべきことあらば』などいへど、さしもおぼえねば」とあり、歌句を「心もそらで」、「出でむ」として載る。

続いて、「かへし、久方の空に心の出づといへば影はそこにもとまるべきかな、として、とどまりけり」とある。

この条は、町小路の女に通う兼家の夜離れが重なり、そして女の出産と続き、冷えきった夫婦仲にあつて作者の心はふんまんやるかたない憤りにあふれている。また、続く御歌は、康保元年夏条に「月夜のころ、よからぬ物語して、あはれなるさまのことども語られても、ありし頃思ひ出でられてものしければ、かくいはる」とあり、三句「ゆくすゑの」とする。当歌に続き、「かへりごと、たはぶれのやうに、おしはかる月は西へとゆくさきはわれのみこそは知るべかりけれ」と兼家と道綱母の和歌唱和が綴られている。

この月夜の情景は、先述した『更級日記』の治安二年夏の夜、作者と姉の不吉で空想的な月影の時空に語られる世界にも似る。この時の道綱母の心情は、正妻の座にいる時姫への恨みや、自らの処遇に対する不満の中にあり、その想いは重苦しい哀しみに閉ざされている。

道綱母の描き出した月は、心の内なる苦しみや悲しみをそのまま描き出し、空虚でほんやりとかすんだ実体がなく、先行きの見えないう将来を託した月夜の風景の中にその心の奥底を描き出している。

『後拾遺集』の女流歌人たちによって詠われた月の世界は、単なる景物を描き出すのではなく、そこには月に照らし出された心の内面

に向かう眼が開かれている。そして、描出された時空は、彼女たちの心の中の光と闇をとらえている。男の訪れを闇夜の中でひたすら待つ境遇に置かれた女たちが見たものは、明明と照らし出す月影であつたらう。その光と影に彩どられた想像世界は、一つの心象的風景となつて日記文学や物語文学へと受け継がれてゆくことになつたのであろう。

『後拾遺集』は、こうした女流歌人の心を凝視する歌を積極的に評価しているように見える。それは、新しい視点で詠まれたさまざまの月歌であり、さらに雑部という新しさの発揮される部立にこれらの女流歌人の雑月歌を配した点にあろう。『後拾遺集』の女流歌人詠の荷つたものは、後に『千載和歌集』に継承される主情的、心情的な表現世界にあるとはいえないだろうか。

注

(1) 高橋文二「風景と共感覚」(春秋社)にこの点についての論がある。

(2) 月のいるを見てよめる

西へゆく心はわれもあるものをひとりないりそ秋の夜の月
(雑上・500 源師賢朝臣)

(3) 夜をのがれて後、西山へまかりこもるとて、人につかは

しける
住みなれし宿をいでて西へゆく月をしたひて山にこそいれ
(雑上・1010 平実重)